

2. 研究成果

A. 計画研究

課 題 1

計画：1-1

滋賀県日野町における野生ニホンザル集団の行動と地域住民に関する調査

中道正之・今川真治・待田昌二
(大阪大・人間科学)

滋賀県日野町に生息する野生ニホンザル集団に関する調査が行われた。すでに、日野町には3集団(日野A, B, C集団)が生息していることがこれまでの調査で把握されており、今年は、個体数や遊動域のより正確な把握、そして、地元住民のサルへの対応も調べることを目的として行われた。

集団が山間部の谷や道をわたったときに、ビデオカメラで撮影し、その分析からほぼ正確な個体数が日野A集団では把握することができた。成体オス12, 成体メス49を含む約135頭からなる集団で、野生ニホンザル集団としては、かなり大型集団であるといえる。他の2集団については、ビデオカメラによる撮影には成功しなかったが、複数回のカウントからB集団が約80頭、C集団が約50頭の個体数であることが把握できた。これまでの調査では、A集団とB集団は行動域が隣接していることがわかっていたが、さらにA集団とC集団でも一部行動域が隣接しており、かつ稀には、両集団が100メートルぐらいの距離で採食することがあることもわかった。

3集団とも、民家や田畑に隣接した比較的低い「里山」を主たる行動域としているため、猿害問題を引き起こしている。その多くは稲と民家近くの畑の野菜である。秋の稲が実った時期には、山に隣接した田に集団が出てきて、稲に被害を与えている。我々は、地元住民との話合いの中で、サルを田から追い出すだけでなく、山の中まで人が入って追うことを求めた。それを実行した一部の地区の住民の中には、猿害防止効果を認める者もいた。しかし、冬季に落ち穂拾いに田に出てくるサルには追い払いは行われず、サルにとっては冬季の重要な食料源になっていると考えられ、また、これが秋の稲の収穫時期の猿害を加速していると

も思われる。

日野町のような「里山」に生息する野生ニホンザルの調査に従事する者にとっては、サルの行動や生態の調査だけでなく、サルに対する地元住民の関心や対応も併せて調査し、サルと人の共存の方策を見つけ出す努力が今後ますます重要になると思われる。

計画：1-2

北陸と東北北部におけるニホンザルの分布変遷の比較研究

三戸幸久(日本モンキーセンター)

これまでの研究で、東北地方北部のニホンザルの分布縮小の原因が、江戸時代の冷害飢饉による狩猟依存体質を歴史的背景に持った、明治以降の近代化に伴う狩猟圧だったことを明らかにした。本研究では隣接する日本海側の北陸二県(山形県、新潟県)でニホンザルの分布が過去どの様に変遷したのかを調べ、東北北部との違いを考察した。

北陸二県の現在の分布は、青森、岩手、秋田の東北三県のそれよりも多い。大正12年の調査は「二十年前棲息セシヤノ説アルモ目下其事実ヲ認メス」(山形県西置賜郡)、「往昔多ク棲息一現今全ク其影ヲ認メ」ず(新潟県東蒲原郡)など他2郡の生息減少を伝えており、明治期に狩猟が盛んに行なわれ、分布の縮小したことがうかがえる。しかし昭和の調査(S.28岸田, S.39竹下)と1978年の環境庁調査および今回の調査結果を併せると、明治～昭和30年代まで分布域の郡単位での絶滅はほとんどなく、孤立化はしているものの各地で群れの生息が確認されている。絶滅を確認した郡は新潟県刈羽郡のみであった。刈羽郡の柏崎市鞆川折居の古老(80歳)によれば「サルは明治から大正にかけて鉄砲で撃って食べていなくなった」と語っており、また大正以前に消滅した新潟県中魚沼郡秋山郷でも古老(80歳)によれば「周辺では昭和22年ごろまでサルをとっていた。昭和10年位まではほとんどの家には銃があった。」と語った。また、南魚沼郡志(大正9年)にも「明治維新後食肉と毛皮の需要激増せるに連れ盛に獵獲せられ今は絶滅に歸したるものも少なからず」と記しており、この両県においても減少の原因は狩猟によるものであることが判明した。

では、なぜ北陸では東北北部とは異なり、ニホ

ンザルは激減を免れえたか。1. 食糧難は東北部ほどではなく狩猟依存は軽度だった。2. 南魚沼郡志が「仏法信仰の結果総べて生物を殺すを殺生といひて卑み従って肉類を食ひ皮類を取扱ふは穢多の事としてこれを嫌忌せり」などと述べているように宗教上の禁忌や蔑視が存在した。これらのことが要因となり狩猟圧を低め、結果としてサルは、広範囲な絶滅を免れたと考えられる。

なお、積雪に伴う生息上の制約はどの降雪地帯においても見つけることはできなかった。

計画：2-1

ニホンザルのオスの集団間移籍と繁殖戦略

古市剛史（明治学院大・一般教育）

屋久島西部林道地域において、入墨を施したオスの集団間移籍と社会行動についての調査をおこなった。本年度は諸般の事情により新たなオスのマーキングは実施できなかったが、昨年度までにマーキングを施した3群13頭のオスの動向を調査した。現在は、追跡調査を継続する一方で、これまでに得られたデータの分析を進めている。

計画：2-2

糞分析によるヤクザルの高度差による食性の比較研究

大竹 勝（日本モンキーセンター）

ヤクザルの野生群における高度差による食性の違いを明らかにするために、安房林道、荒川林道、黒味林道における群れを海岸域から上部1200m付近まで分布状態を調査し、糞の収集を行ない水洗乾燥後実体顕微鏡にて分析を行った。

上部域1000m以上の地域では、黒味林道で1群を確認。荒川林道では高深小屋と新高塚小屋の間で1群を確認。安房林道では紀元杉上部で1群と上部域で確認された群れの数は少なかった。

下部域は安房林道ヤクスギランド安房間で4群を確認したが、黒味林道では害獣駆除のシカ打ちが行なわれていたため群れの確認はできなかったが糞の収集は可能であった。

黒味林道上部域では近年群れの痕跡の減少傾向がみられるが、今回は特に少なく、糞の収集を10個にとどまった。この林道では林業施業が行なわれていないので原因は別の要素によるものと考え

られる。下部海岸域における猿害駆除との関連で群れの下部への垂直移動も考えられるので今後調査を続行する必要がある。

上部域の群れの観察結果から見て、常緑広葉樹の葉の採食が多いことは今までの調査と同じであるが、今回新らしく確認された食物として、ヤクスギの雄花の採食は注目に値する。黒味林道1200m地域で観察した群れで、多数の個体が雄花をつけたヤクスギに群がり雄花をむさぼり食う様子が観察されたが、同時期に今まで観察された例はない。糞分析でも過去には確認されていない。新しい食物への拡大と考えられる。黒味林道で収集した糞にはいずれもスギの雄花が検出されたが葉の部分は検出されていないことから雄花だけを採食したものである。今後秋から冬にかけて群れの過疎化と食性についての調査が必要である。

下部域においては黒味林道ではあまり変化がなかったが、安房林道下部の群れの糞からボンカンの種子が検出されているが、猿害による果樹園での採食なのか観光客による給餌なのか量が少なく断定はできない。他の種子ではタイミンタチバナ、イヌビワ、シラタマカズラなどの種子が検出された。今回12月上旬の調査では上部域の糞の収集が少なく、下部域との比較は充分ではない。

計画：3-1

ヒヒ放飼群におけるオス間の連合形成の要因と結果の解析

広谷(宮藤)浩子（神奈川県立博物館）

本研究はヒヒ類のオス間連合がどのような個体間で形成され、どのような役割を果たすのかを明らかにして、ヒヒ類全体のオス間関係の系譜について考察することを目的とする。この第一段階としてオス間交渉のあり方をアヌビスヒヒとマントヒヒで比較した。

日本モンキーセンターのアヌビスヒヒ放飼群（40頭）で予備的に観察した後に、鹿児島市平川動物公園のマントヒヒ放飼群（29頭）を集中的に観察した。マントヒヒの群れは、オトナオス13、オトナメス8、コドモ6、赤ん坊2でオトナオスに若干偏る構成であった。ハレムは4つあり、うち2つはペア型であった。

マントヒヒのオス間交渉は以下のような特徴を持つ。1. 音声を伴う接近、尻や生殖器の接触、